



語彙指導における「取り立て指導」と「取り上げ指導」に関する一考察：
偶発的語彙学習への接続に向けて

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 北海道教育大学旭川校国語国文学会 公開日: 2026-02-05 キーワード: 作成者: 岡本, 岳之 メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.32150/0002000760

語彙指導における「取り立て指導」と 「取り上げ指導」に関する一考察 —偶発的語彙学習への接続に向けて—

岡本 岳之

1 問題の所在

本論では学習者の「読むこと」における語彙学習に焦点を当て、それに基づいた「取り上げ指導」と「取り立て指導」の連関の必要性について論じる。具体的には学習者が日常行う「読む」活動において、偶発的に未知語（全く知らない語から知っているが理解が浅いレベルまで）に遭遇した際の語彙学習を想定している。

語彙指導研究において長年重視されていることは、「取り立て指導」の充実と「取り上げ指導」の連関を図ることである。松川利広（2002）では、「「取り立て」指導のさらなる充実と、「取り立て」指導と、「取り上げ」指導の統合を図るうえで、語彙指導を国語科の全体指導計画の中に位置づけた、ダイナミックな国語科のカリキュラムを開発していくことが求められている」と述べられている。しかし、井上一郎（2013）は、平成20年版の学習指導要領によって、語句・語彙指導は、理解・表現学習の中で明確に位置付けたり、取り立てたりしなければいけないようになったが、「動向を探ってみても、改定後そのような反響が見られたというようには総括できない」と指摘している。さらに、萩中奈穂美（2022）は、「体系的な語彙学習」（「取り立て指導」に相当）と「機能的な語彙学習」（「取り上げ指導」に相当）の「補完的結合を改めて検討する必要がある」と述べている。

他方で、中村和弘（2022）は、近10年間の語彙指導を概観したうえで、「今後、理解学習や表現学習における語彙指導は、読む作品の側から指導の内容や方法を検討するだけでなく、その作品を読む学習者の側に軸足を置き、学習者の視点から、取り出し指導として扱う言葉や扱い方について検討していくことが、より重要になってくると思われる」と述べている。

以上のように、長年、語彙指導研究において、「取り立て指導」と「取り上げ指導」の連関という点が議論として挙げられているが、それらの検討・充実が現在でも課題であるということ、さらに、それを改善するために、近年では、学習者の文脈を意識して、語の選択、学習のタイミング等を工夫した語彙指導の方法について議論されていることがわかる。しかし、「取り上げ指導」は、あくまで、教材文における注目すべき語を教師がピックアップすることが主であり、そのような点で学習者の文脈とつなげるのが難しい背景もある。そこで、本稿では、「取り上げ指導」にとどまらず、「個別の学習者の語彙学習」を視野に入れた、「語彙指導」のサイクルについて想定し、そのうえでの「取り立て指導」のあり方について考察していきたい。

2 取り立て指導と取り上げ指導のサイクル

語彙指導研究において、「取り立て指導」と「取り上げ指導」の連関という点は長年検討されており、現在に至っても課題の1つである。2000年以前の語彙指導の「取り立て指導」は、語彙論を扱うことが主流であった。そのような「取り立て指導」を進めてきた立場の研究について、宮島達夫（1978）は、「むしろ読み方教育の中で、あるいは、理科、社会など国語科以外の教科でおし

えられる際に役立つことを指摘しながらも、詳細な関連づけを行ってはいない」と指摘した。つまり、それらの研究は、文章表現、理解過程における語彙指導との関連性を認めつつも、それらの有機的なつながりに関する言及は行っていない。そのような状況の中でもその点について言及したのが、安達隆一・豊橋市立二川小学校（1973）である。安達ら（1973）は、「語彙指導を体系的に行うのは、鋭い語感を養い、上記のように読解に応用しうる力を養うことでもある。通り一遍の意味を把握するのではなく、文章において使われる語の必然性を考え、把握することを通して、深い読みにいたること、これを可能にするものとして語彙指導があると強い。語彙の体系的指導は、こんなふうに読解と深くかかわりあっているのである」と述べている。しかし、井上一郎（2001）は、この「取り立て指導」の方法について、「これらの体系的指導が、文章における豊かな表現、深い読み取りの前提となる可能態としての位置にとどまるならば、子どもである学習者は、取り立てられ、教えられた事柄を自らの手で文章表現・理解過程に応用していかなければならない」という問題を提起し、「体系的指導によって得た能力を前提として、直面する文章を語彙的観点から捉えていく具体的な実践体系が模索されなければならない」と指摘している。松川（2002）も、従来の「取り立て指導」に関する研究を整理したうえで、「現在求められているのは、両者を統合するための指導原理である」と先に挙げた井上氏の指摘に賛成する形で課題を提起している。

しかし、これらの議論は、それ以降、深まったと言えるような状況にない。井上（2013）は、全国大学国語教育学会の研究発表要旨集10年間分及び公表された論考を考察した中の1つの傾向として、「系統的・段階的指導と機能的・機会的指導との調和の議論は、見られなくなった」ことを挙げている。また、2008（平成20）年版の学習指導要領において、語句・語彙指導は理解・表現学習の中で明確に位置付けたり、取り立てたりしなければいけなくなったが、「動向を探ってみても、改定後そのような反響が見られたといふに総括できない」とも指摘している。他にも、松本修（2014）は、実際の語彙指導では、「取り立て指導」で言葉の意味に焦点化されることによって、様々な教材文や国語の授業の流れの外に語彙指導があるように意識されてしまっていると指摘している。そして、学習デザインとして取り上げ指導と取り立て指導では大きな相違が生まれてしまっており、それらを統合することが困難になっていると説明している。

これらの傾向に課題意識を持った研究として萩中（2022）が挙げられる。萩中（2022）は、「体系的な語彙学習」と「機能的な語彙学習」の「補完的結合を改めて検討する必要がある」（p.50）と述べ、「書くこと」の単元内に機能的な語彙学習の場と体系的な語彙学習の場をつくり、それらの課題を解決するための実践を試みている。

以上のように、「取り立て指導」と「取り上げ指導」の連関という点では、現在においても課題があり、とりわけ、理解学習におけるそれらの有機的結合という点が喫緊の課題であると言える。

3 読むことにおける語彙指導の在り方

中村（2022）は、甲斐陸郎（2012）に代表されるような、教材となる文章の中の言葉（作品語彙）に着目した理解学習における語彙指導研究は現在も継続的に行われていると述べている。そして、その一方で、「今後、理解学習や表現学習における語彙指導は、読む作品の側から指導の内容や方法を検討するだけでなく、その作品を読む学習者の側に軸足を置き、学習者の視点から、取り出し指導として扱う言葉や扱い方について検討していくことが、より重要になってくるとと思われる」と指摘している。従来の理解学習、とりわけ「読むこと」の学習における語彙指導は、作品語彙に重きを置き、読解に資する語彙指導の在り方を重視してきた。つまり、理解学習における「取

り立て指導」と「取り上げ指導」の連関を図るうえで、目標とするのは、あくまで、その教材を読解することであった。ただ、そこには、2つの課題がある。1つ目は、中村（2022）が指摘するように、学習者の文脈が意識されなければならないということである。この考え方は、塚田泰彦・池上幸治（1998）が提案した、認知論的アプローチの考えを踏襲したものである。塚田・池上（1998）は、授業で扱われる語の文脈と学習者の文脈に齟齬があるとし、それを結び付ける手立てとして意味マップを用いた語彙指導の方法を提案している。自らの語彙を賦活することによって、文章の語をそれらに位置づけ、再体制化することを可能にするこの方略は、学習者の理解学習における語彙を拡充するための方法として画期的なものであった。ただ、その方法にも課題がある。それは、あくまで、重要な作品語彙に対して、意図的にアプローチしているという点である。そこで、もう1つの課題として浮き彫りになるのが、学習者自身の理解過程における語彙学習の方略も視野に入れなければならないということである。学習者は、普段の理解過程において、自分の文脈で重要語句としてみなした語へのアプローチを行っている。しかし、それとは切り離れたところで、読解を目標とした語彙学習を行うことは、学習者の理解過程における語彙学習と一致しない点があると言える。中村（2022）は、「取り立て指導」について、「その学習過程においては、語彙の拡充とともに語彙の学習方法も身につけていくことが目指されている」と述べている。このように、読解のためではなく、理解過程における語彙の学習方法の面も視野に入れた、「取り立て指導」の設定が求められる。以上の点を整理すると、従来行われている、「読むこと」における語彙の「取り立て指導」と「取り上げ指導」の連関は、教材を読解することを目標としてターゲットとなる語句を選び、それに沿った語彙学習を対象とすることが主であった。しかし、それでは、学習者自身の語彙学習という点での視点が欠けている。今後の理解過程における語彙指導は、学習者の理解過程における語彙学習そのものの様相を捉え、それを明確にする必要がある。

4 偶発的語彙学習の検討

本章では、学習者の理解過程における語彙学習の中でも特に、偶発的語彙学習について取り上げ、検討していく。

L.S.P. ネーション（2005）は、英語教育の語彙学習について母語教育から第二言語教育まで幅広く論じているが、偶発的語彙学習は、「語彙学習の全ての情報源で最も重要なもの」と位置づけ、「第1言語を学習する第1言語話者には、このことは特にあてはまる」と述べている。偶発的語彙学習とは、「学習者の注意の主な焦点がテキストのメッセージにあてられている際に、通常の言語使用でリーディングやリスニングすることからの語彙の偶発学習」のことであり、つまり、日常的に行われている様々な理解学習における「文脈からの学習」であると説明している。そして、「文脈から語彙を学習することは、主に偶発学習でなされるが、そのような学習を実行するのに必要とされるスキルと方略を発達することに関する、慎重で意図的な焦点が必要である」と指摘している。

日本の「読むこと」における「取り上げ指導」に関わる語彙学習は、読み取りたい主題に関わる語や学習者にとっては難しいだろうと想定される語を教員の側で精査し、取り上げていた。そのように取り上げたものと偶発的語彙学習の接点はもちろんあるだろうが、より、偶発的語彙学習に焦点を当てたアプローチ（「取り立て指導」と「取り上げ指導」の連関）を考えるべきであろう。

具体的なアプローチについて、ネーション（2005）は、「文脈から推測することが重要であるゆえに、教師と学習者の両方が推測方略について勉強する時間を費やすことは価値がある」と指摘している。そのため、学習者の推測方略について捉えることが重要であると考えられる。

文脈からの推測には大きく2つのアプローチがある。1つ目は、帰納的なアプローチである。Clarke and Nation (1980) は以下の5つのステップを想定している。

- ステップ1 未知語の品詞を決める。
- ステップ2 単語の当面の文脈を調べ、必要なら文法的に平易化する。
- ステップ3 単語の、より広い文脈、すなわち、隣接している文章や節との関係を調べる。
- ステップ4 推測する。
- ステップ5 推測をチェックする。
 - 推測は未知語と同じ品詞であるか確認する。
 - 推測を未知語に置き換え、文脈にうまく当てはまるか確認する。
 - 未知語を部品に分解し、部品の意味が推測を支持するか確認する。
 - 辞書でその単語を調べる。

一方、演繹的なアプローチとして、ネーション (2005) は以下のようなステップを提示している。

- ステップ1 単語の意味を推測する。
- ステップ2 さまざまな手がかりを用いて、推測を正当化する。
- ステップ3 必要なら、推測を再調整する。

以上のように、大きく2つの推測のアプローチがあるが、それぞれを想定しても、取り立てるべき語彙知識は関係してくる。これらのアプローチの中でどのような語彙知識が活用され、それによりどのような語彙学習が行われるかを明らかにしていく必要があるだろう。

岡本岳之 (2019) は、国語科教育における語推測に関する研究を行っている。この調査では、アンケートを実施し、その分析から推測のラベリングを行っている。以下がその内容である。

表1 岡本 (2019) における語推測方略

未知語自体に関する既存知識による推測	ア, 未知語に関する形態
	イ, 未知語に関する類義語
	ウ, 未知語に関する対義語
	エ, 未知語に関する多義的知識
	オ, 未知語の用例知識
	カ, 語自体からのイメージ
	キ, 未知語の音韻知識
文章の文脈による推測	ク, 文章内の知識
	ケ, 未知語が表れた文の統語知識
	コ, 文章と一般知識との照合

ただ、岡本 (2019) では、アンケート調査という、作業的負荷により調査対象の細かい推測状況を見取るのに困難な方法が用いられていること、文脈よりその語の言語的性質に焦点が当てられていることなどが問題点として挙げられる。理解過程における語彙学習に焦点を当てるには、その文

脈の手がかりも視野に入れたより多角的な調査、分析が必要であろう。

また、石黒圭（2020）においては、日本語学習者（第二言語）の語義推測について調査されている。この調査では、ターゲット語を含む文を調査対象に提示したうえで、調査員との質疑応答をとおして推測の手がかりが分析されている。以下の表2は、その調査における語義推測の手がかりをまとめたものである。

表2 石黒（2020）による日本語学習者の語義推測方略

語彙の手がかり	① 派生的手がかり
	② 語構成的手がかり
	③ 表意的手がかり
	④ 表音の手がかり
構造的手がかり	⑤ 連語の手がかり
	⑥ 統語の手がかり
	⑦ 共起の手がかり
	⑧ 関係の手がかり
内容的手がかり	⑨ 直感の手がかり
	⑩ 常識の手がかり
	⑪ 経験の手がかり
環境の手がかり	⑫ 対話の手がかり
	⑬ 方略の手がかり

石黒（2020）は、調査をとおして、これらの手がかりの中でも「構造的手がかり」を用いた推測が一番堅実であること、さらに、推測が上手な学習者は複数の手がかりを組み合わせる傾向や自分の理解を疑い再解釈する傾向があることなどが明らかになったと論じている。多角的に語義推測の様相を捉えている点で参考になるが、日本語母語話者による推測でないこと、固有名詞限定の調査であることなど、日本語母語話者の学習者による偶発的語彙学習の様相を捉えるためには、さらに発展した内容が必要となるだろう。

以上のように、日本語理解過程における偶発的語彙学習の様相を捉えようとする試みは昨今行われている。ただ、課題としては以下のような点が挙げられる。

- ① 偶発的語彙学習の様相をより多角的に捉えるために、調査の方法について吟味するべきである。
- ② 偶発的語彙学習の様相を捉えたうえで、「取り上げ指導」、「取り立て指導」にどのように援用するか吟味するべきである。

岡本（2019）では、大学生、高校生を対象としたアンケート調査が、石黒では、日本語学習者を対象とした質疑応答型の調査がそれぞれ行われている。対象者を誰にするのか、どのような調査方法で行うのかによって、得られるデータは様々になるだろう。目的に沿って多様な調査を行っていく必要があると考えられる。

一方で、②に関する視点も忘れてはならない。偶発的語彙学習の様相を明らかにしたうえで、優

秀な推測方略を「取り立て指導」として学習し、「取り上げ指導」の中でトレーニングしていくという単純なサイクルでは、ある種、語彙学習を中心に添えた言語トレーニングの要素が強くなってしまう。あくまでも理解学習における目的は理解することであり、先にも述べたとおり、「取り上げ指導」では読解することに最終的に主眼を置くことになるだろう。偶発的語彙学習の様相を捉え、語を理解するだけでなく、その行為自体と文章全体を「読む」ことの有機的なつながりを明らかにしていくことで「取り上げ指導」と「取り立て指導」の連関を図ることができるのではないか。

5 成果と展望

本論においては、国語科における「取り立て指導」と「取り上げ指導」の連関における課題を明らかにしたうえで、偶発的語彙学習に焦点を当てる意義と現在のそれらの研究についての整理を行った。今後は、それらに関する発展的な調査を行いながら、「取り立て指導」と「取り上げ指導」の有機的なつながりを模索していく必要があるだろう。

【参考文献】

- Clarke,D.F and Nation,I.S.P (1980) 'Guessing the meanings of words from context :strategy and techniques' ,System,8,211 – 220
- I.S.P. ネーション 吉田晴世・三根浩(訳) (2005)『英語教師のためのボキャブラリー・ラーニング』松柏社(Nation,I. S.P.(2001).Learning Vocabulary in Another Language.Cambridge University Press.)
- 安達隆一・豊橋市立二川小学校 (1973)『語い指導の系統と方法』、明治図書
- 石黒圭編著 (2020)『文脈情報を用いた文章理解過程の実証的研究 —学習者の母語から捉えた日本語理解の姿—』ひつじ書房
- 井上一郎 (2013)「理解学習・表現学習の中での指導の内容と方法」全国大学国語教育学会編『国語科教育学研究の成果と展望Ⅱ』学芸図書、317—324
- 井上一郎 (2001)『語彙力の発達とその育成－国語科学習基本語彙選定の視座から－』明治図書
- 岡本岳之 (2019)「認知論的アプローチに着目した語彙指導研究－偶発的語彙学習に焦点を当てて－」『全国大学国語教育学会国語科教育研究大会発表要旨集』137
- 甲斐陸郎 (2012)「語句に着目した読み方指導－これまでの取り組みと今後の課題－」『全国大学国語教育学会国語科教育研究大会発表要旨集』122
- 塚田泰彦・池上幸治 (1998)『語彙指導の革新と実践的課題』明治書院
- 中村和弘 (2022)「理解学習・表現学習の中での指導の内容と方法」全国大学国語教育学会編『国語科教育学研究の成果と展望Ⅲ』学芸図書、333—339
- 萩中奈穂美 (2022)「語彙学習力を育成する学習指導過程の開発」『国語科教育』92
- 松川利広 (2002)「体系的指導の内容と方法」全国大学国語教育学会編『国語科教育学研究の成果と展望』学芸図書、348—352
- 松本修 (2014)「言語活動における語彙指導の可能性」『月刊国語教育研究』501
- 宮島達夫 (1978)「語彙論を教える意味」『教育国語』54

(おかもと たけし 北海道留萌高等学校教諭)